東アジアの金工品
―学習院大学蔵林コレクション―

執筆者一覧

鶴間　和幸（つるま　かずゆき）　学習院大学文学部教授

鈴木　　舞（すずき　まい）　東京大学大学院人文社会系研究科助教

山田　高大（やまだ　たかひろ）　学習院大学人文科学研究科博士前期課程

邉見　　統（へんみ　おさむ）　学習院大学文学部非常勤講師

河野　剛彦（こうの　たけひこ）　駿河台大学メディア情報学部非常勤講師

はしがき

学習院大学の卒業生の林裕己氏が本学に寄贈された中国銅鏡コレクションが、学習院大学国際研究教育機構編『学習院大学蔵中国銅鏡図録　林コレクション』として2018年に刊行されたことによって、すでに全国の研究者や博物館から多くの反響をいただいた。図録は全国85の大学図書館などに所蔵されており、すでに中国銅鏡研究の重要なコレクションとして認知されている。今回はそこに未掲載のものを含めて『調査研究報告』としてまとめることができ、林コレクションを最終的に全貌を公表することができた。

学習院大学に寄贈された林コレクションは、学内の組織改編に伴って学習院大学国際研究機構から学習院大学国際センターに所管が移行している。将来は計画中の学習院ミュージアムの方に移行される予定である。また今回の報告書作成に当たっては、東洋文化研究所のアーカイブプロジェクトとして整理刊行の作業が進められてきた。東洋文化研究所はすでに「東アジア学バーチャルミュージアム」でも一部公開したことがあり、整理の実績をもっている研究所である。

報告書の内容は中国歴代の銅鏡から、朝鮮、日本で制作された銅鏡まで、幅広く収められており、東アジア全体の視野から銅鏡研究を進められる資料が整ったことになる。さらに銅鏡以外にも貨幣、銅鈴、帯鉤、車馬具なども含まれ、改めて林コレクションの収集の関心の広さを実感することになった。銅鏡の図版には全体の写真だけでなく、断面なども丹念に収めているので、型式の研究に役立つ貴重な材料が提供されたと思われる。

中国の青銅鏡は中国の美術、考古、歴史の研究にとって重要な資料となっている。鋳造技術の高さ、紋様や銘文に込められた時代性など、文献史料では得がたい知見が豊富に含まれている。それはまた青銅鏡自体が個人の所蔵物を超えた政治的な威信財としての役割をもっているからである。中国古代では官吏はみずからの墓葬という死後の世界にまで持ち込んだ。前漢王朝に代わった王莽の新王朝も、王氏が劉氏に替わる政権であることを主張するために、王氏や新家の文字を銘文に刻んだ。三国の魏の文帝が邪馬台国の使節に銅鏡百枚を賜与したのも、外交儀礼上重要な効果があったからであった。それは日本の古墳時代の全国の首長が中国鏡を埋蔵することにつながってゆく。

本報告書が関心をもつ多くの方々の研究に寄与できることを願ってやまない。

学習院大学文学部　鶴　間　和　幸

凡　　例

一．本書について

本書は、学習院大学東洋文化研究所2019年度アーカイブズプロジェクト「学習院大学所蔵古代中国青銅器の調査と研究」セクション（セクションリーダー：鈴木舞〔東洋文化研究所助教（当時）〕）における調査・研究の成果である。

二．プロジェクトについて

上記のプロジェクトでは、学習院大学国際センターの所蔵する東アジア（中国・朝鮮半島・日本）の金工品に関する調査・研究を行った。これらの資料は、2011年以来、学習院大学卒業生である林裕己氏によって、数度に分けて寄贈されたものであり、現在「林コレクション」と総称される。そのうち青銅鏡134面については、既に、『学習院大学蔵中国銅鏡図録　林コレクション』（学習院大学国際研究教育機構編、2018年３月、以下では『学習院鏡』と略称する）、また青銅鏡５面については、学習院大学東洋文化研究所ＨＰ内の「東アジア学バーチャルミュージアム」（https://www.gakushuin.ac.jp/univ/rioc/vm/c01_zenkindai/c0105_doukyou.html）において、公開されている。本プロジェクトでは、これらの成果を受けつつ、未公開の資料群も含めて、資料群全体の様相を明らかにし、公開することを目指した。

なお、プロジェクトメンバーは以下のとおりである（敬称略、所属は2019年度当時）。

鈴木　　舞（東洋文化研究所助教、研究員）
鶴間　和幸（文学部教授、東洋文化研究所研究員）
村松　弘一（淑徳大学教授、東洋文化研究所客員研究員）
邉見　　統（文学部非常勤講師、東洋文化研究所客員研究員）
河野　剛彦（人文科学研究科博士後期課程、東洋文化研究所アルバイト）
山田　高大（人文科学研究科博士前期課程、東洋文化研究所RA）

三、資料数について

林コレクションの資料総数は357点である。その中には金工品として、鏡314点（陽燧３点を含む）、帯鉤14点、鈴９点、車馬器（蓋弓帽）１点、貨幣19点があり、また管玉１点が含まれる。

四、蔵品番号について

本資料群には、2020年３月時点において、３種の管理番号が付されていた。

第１種はアルファベット＋数字３桁で構成され、T001～T172／S173～S240／H001～H115／X016（H091のみ３点から成る）である。いずれも資料寄贈時に付された番号と推測される。そのうちT001～T172、すなわち鏡172点は、2011年６月に東洋文化研究所へ寄贈されたものであり、その後、2012年度に国際交流オフィス（2015年度に国際研究教育機構へ改称）、2018年度に国際センターへ移管された資料群である。それ以外の186点（鏡ほか各種）は、2012年度以降に国際交流オフィスに寄贈された資料群であると推測される。第２種は１～335（331のみ３点から成る、番号なし１点）の番号であり、これは2018年度の国際センター移管後の再整理番号である。両番号は、各資料の包装材あるいは箱に貼付されている。また第３種として、『学習院鏡』中で付された番号（１～134）がある（資料そのものには貼付されていない）。

本書では、このうち第２種を国際センターにおける本コレクションの蔵品番号と見なし、これに基づいて、番号を付している。なお、本書の「林コレクション蔵品目録」は、これら各種番号の対照表も兼ねている。

五、調査・執筆分担について

林コレクションの調査、本書における執筆の分担は、下記のとおりである。

・先秦鏡、漢鏡	山田高大
・隋唐鏡	河野剛彦
・宋～明清鏡	邉見統
・朝鮮鏡、和鏡及びその他青銅器	鈴木舞
・林コレクション蔵品目録	山田高大・鈴木舞

六、写真撮影及び全体の編集作業は鈴木が行った。また、写真の整理・加工は山根美紀氏にご助力頂いた。なお、19、20、26（正面）、30（正面）の写真については、国際研究教育機構において撮影されたものを利用した。

以上

目　　次

1　鏡…… 2
　1－1　中国鏡…… 2
　　先秦鏡…… 2
　　漢・三国鏡…… 4
　　隋・唐鏡…… 22
　　宋～清鏡…… 26
　1－2　朝鮮鏡（高麗）…… 38
　1－3　和鏡…… 48

2　帯鉤…… 60

3　鈴…… 62

4　車馬器…… 64

林コレクション蔵品目録…… 66

1　鏡

1－1　中国鏡

先秦鏡

これまでのところ、東アジア最古の銅鏡は、中国の新石器時代後期である斉家文化期にまで遡る。斉家文化では多くの青銅器が出土しており、青海省では前2000年ごろの墓より銅鏡が１枚見つかっている。その銅鏡は白銀色より程遠い赤味がかった色を呈しており、人の姿を映し出すのは困難であったとされる。続く殷代から西周時代、中国は青銅器時代を迎えるものの、銅鏡の製作事例はあまり多くなく、殷後期の殷墟遺跡、西周時代の周原遺跡・三門峡虢国遺跡等、幾つかの遺跡での出土を数える程度である。この時期、国家を維持していくために、青銅彝器を用いた祭祀が重要であったが、銅鏡は祭祀儀礼に用いられることはほとんどなかったとされる。

春秋戦国時代になると、銅鏡は日用品としての需要が高まった。これまでのところ、中国各地からすでに1000面を超える数の銅鏡が出土している。また、春秋時代の遺跡である山西省侯馬遺跡からは銅鏡の鋳型が出土しており、銅鏡の鋳造技術を知る上で重要な資料となっている。本コレクションにも戦国時代の鏡が幾点か収蔵される。それらは、『学習院鏡』に掲載されているが、これら戦国鏡の特徴としては、３本の線が平行に描かれる三弦鈕、縁が匕面になっていることが挙げられる。またこの時期、鏡形の銅器として、陽燧（凹面鏡）が存在する。本書では、先の図録では未報告のものとして、陽燧２点を掲載する。

1．陽燧（蔵品番号328）
直径4.8cm、重量16g、周代

2．陽燧（蔵品番号331-1）
直径4.8cm、重量24g、周代

漢・三国鏡

漢代は後の唐代と合わせて銅鏡の興隆期であった。そのため、漢鏡は非常に多く製作されており、鏡の種類も多く存在する。その用途は、魔除けや化粧であったとされている。漢鏡には鏡背に銘文をもつものが散見される。本コレクションの中にも銘文の鋳込まれたものがあり、例えば19の四神規矩鏡がそれである。銘文には人々の心情、思想、国家礼賛といった文言が書かれており、時代の動向を理解するための一助となるため、史料として非常に重要である。

前漢前中期では蟠螭文鏡（図１及び『学習院鏡』9,10,12～15参照）、渦状虺文鏡（３～５）や草葉文鏡（図２及び『同』25～28参照）、星雲文鏡（６～８）、虺龍文鏡（９～11）などが製作された。その形態的特徴として、この時期になると、戦国時代以来の三弦鈕だけでなく、新たに半球状鈕や連峯鈕が出現する。鏡縁は匕縁から、平縁が主流となっていく。また、当該期の銘文には抒情詩が表現されるものが多いことも特徴のひとつとされる。

前漢後期から新にかけては方格規矩鏡（16及び『同』53～67参照）が製作されるようになった。前漢後期の儒家思想の受容と相俟って製作された方格規矩鏡は鈕や鈕座といった天地構造を表す文様に四神を画くことにより宇宙観を具現化していた。王莽はこれを官営工房に製作させ、政治的に利用したとされる。

後漢では鏡工はグループもしくは個人で淮河流域や江南の呉にて活動し、そこで盤龍鏡（図３及び『同』79～85参照）や画像鏡（図４及び『同』77,78参照）を製作した。また、後漢になると、図像が浮彫になっているものが出現し始めた。一方、益州の広漢郡では神獣鏡が製作された。神獣鏡は内区に西王母や東王父といった神仙と神獣が描かれた銅鏡のことであり、当該期に流行した神仙思想の影響を見て取ることができる。その後、神獣鏡は例えば20に見られるように、三国時代に継承されていった。

三国時代では、主に魏・呉で銅鏡が製作された。漢鏡の模倣が行われ、上述したような神獣鏡や方格規矩鏡が製作されたが、図像の粗雑なものが多くなる。この後唐代に至るまで銅鏡製作は低調であり続けた。この時代、銅鏡は政治的に利用されており、例えば魏では卑弥呼に銅鏡100枚を渡すなどの形で活用された。

図１　蟠螭文鏡
（直径11.0cm、重量126g、蔵品番号177）

図２　草葉文鏡
（直径13.8cm、重量272g、蔵品番号31）

図３　胡氏盤龍鏡
（直径11.7cm、重量352g、蔵品番号301）

図４　神人車馬画像鏡
（直径21.6cm、重量992g、蔵品番号99）

（出典：図１～図４はそれぞれ『学習院鏡』15,25,80,77より転載）

３．渦状虺文鏡（蔵品番号16）

直径9.2cm、重量51g、前漢前期

三弦鈕で、内区には４つの乳とその間に蟠虺文がある。また乳と蟠虺文の周囲には線状地文が施され、それらを取り囲むように16連弧文が配置されている。外区は素文。鏡縁は匕面縁。

4．渦状虺文鏡（蔵品番号14）
直径9.0cm、重量52g、前漢前期

5．渦状虺文鏡（蔵品番号17）
直径8.9cm、重量45g、前漢前期

６．星雲文鏡（蔵品番号26）

直径13.1cm、重量355g、前漢中期

連峯鈕をもつ。鈕座を取り囲むように16連弧文が配置される。内区は連珠文に取り囲まれた４つの乳によって区画され、その間に星雲文が配置されている。外区は16連弧文より構成されている。

7．星雲文鏡（蔵品番号229）
直径10.0cm、重量161g、前漢中期

8．星雲文鏡（蔵品番号288）
直径10.1cm、重量170g、前漢中期

９．虺龍文鏡（蔵品番号295）

直径8.0cm、重量113g、前漢後期

半球鈕。内区には斜め傾いた櫛歯文が２か所あるほか、４つの乳とその間に４つの虺龍文が配置されている。その外側に斜めに傾いた櫛歯文が配される。外区は素文。平縁。

10. 虺龍文鏡（蔵品番号204）
直径8.8cm、重量17.8g、前漢後期

11. 虺龍文鏡（蔵品番号22）
直径10.1cm、重量213g、前漢後期

12. 四乳禽獣文鏡（蔵品番号55）

直径11.2cm、重量278g、前漢後期か

半球鈕。鈕を囲むように二重の圏帯が巡り、その間に３本線が４つ配される。その周りを斜めに傾いた櫛歯文が取り囲む。内区には４つの乳があり、その間に細線で４体の獣文が配置されている。外区は複線波文が描かれている。

13. 四乳八禽文鏡（蔵品番号198）

直径9.3cm、重量181g、不詳

頂部がやや平らな半球状の鈕をもつ。その周りを斜めに傾いた櫛歯文が取り囲む。内区は「家常富貴」銘及び４つの小乳が施され、各文字の左右には向かい合うような形で鳥文が配置される。その周りは斜めに傾いた櫛歯文が取り囲む。外区は素文である。平縁。文様・銘文を構成する線は明瞭ではなく、前漢鏡の明清あるいは高麗期の踏み返しの可能性が高い。

14. 四乳四神鏡（蔵品番号70）

直径9.9cm、重量182g、後漢前期

鈕は半球式であり、その周りを斜めに傾いた櫛歯文が取り囲む。内区は４つの乳とその間に細線で獣文が配置され、さらにその外側を斜めに傾いた櫛歯文が囲む。器表面は、全体的に緑青が付着している。

15. 四乳八禽文鏡（蔵品番号71）

直径7.1cm、重量96g、後漢前期か

半球鈕。内区には乳４つが均等に配置される。乳と乳の間にはそれぞれ２羽の鳥文が施されている。その外側には櫛歯文が配置される。外区は素文。平縁。

16. 方格規矩鳥文鏡（蔵品番号250）

直径9.7cm、重量117g、後漢中期

半球鈕の周りを方格で囲む。内区にはT字文が描かれている。各T字文の左右には、２羽の鳥が向かい合うように配されている。かなり簡略化された方格規矩鏡である。

17. 細線式獣帯鏡（蔵品番号284）

復元径16.6cm、重量202g（破片）、後漢中期

外区には外周に複線波文、その内側に鉅歯文帯が巡っている。内区の外周に櫛歯文帯が巡り、その内側には連弧文座の小さな乳が配され、それぞれの小乳の間には、細線で施された獣文が確認できる。さらに内側にも、櫛歯文が一周巡っている。平縁。鈕は欠損している。

18. 内行花文鏡（蔵品番号74）

直径9.0cm、重量145g、後漢中期

半球鈕の周囲に、８連弧文が配される。内区は同心円と平行線より構成される雲雷文と櫛歯文が配置されている。外区は素文である。

19. 方格規矩鏡（蔵品番号137）

直径16.6cm、重量572g、新か

半円状の鈕である。鈕座は四葉文を呈しており、その周りを方格が取り囲む。方格は12の小乳があり、その間に十二支が飾られている。内区にはTLVの典型的な規矩文がある。また８つの小乳があり、その間には白虎・青龍・朱雀・玄武の四神のほか瑞獣が配置されている。また銘文があるが、これは擦れの関係で判読できない。外区は内側より鋸歯文、波文、鋸歯文が配置されている。「…真大巧…」の施銘がみられる。

20. 画文帯神獣鏡（蔵品番号195）

直径15.5cm、三国

同向式の神獣鏡である。内区の上段は中央に伯牙があり、その周りに２体の神仙と神獣が配置されている。中段は右に東王父、左に西王母が描かれている。下段の中央の神仙は恐らく黄帝であり、その周りを神獣が囲む。内区の外側には14個の半円と方格があり、方格には銘文が施されている。外区は画文帯であり、中に鳥のような文様を確認できる。

隋・唐鏡

隋唐鏡の特徴としては、従来の伝統的要素を受け継ぎつつ、文様や形態が多様化し、大いに発展を遂げたことが挙げられる。その発展段階は、6世紀後半～7世紀後半(十二支唐草文鏡・四神鏡・団花鏡・方格四獣鏡など)、7世紀後半～8世紀初頭（海獣葡萄鏡、瑞獣鏡など)、8世紀初頭～8世紀後半（花鳥鏡・瑞花鏡・飛仙鏡・月兎鏡・雲龍鏡など)、8世紀後半～10世紀初頭の4期に分けられる。特に8世紀初頭～8世紀後半にかけての期間は玄宗期にほぼ重複し、この時期の銅鏡は、鏡背が内区と外区という従来の構成だけではなく、鏡背全体を用いて鳥獣や故事が描かれるようになった。さらに鏡自体の形状も円形に加えて、八稜鏡・八花鏡などの花式鏡が出現するようになり、より多様な表現が見られるようになる（22の月兎八稜鏡もその一例である)。

また、唐代は、朝貢貿易に代表されるように国際的な交易関係が発展した時期であり、朝貢の記録を見ると中国国外の珍しい動植物（獅子や犀など）が多く唐にもたらされている。これらが銅鏡の図様に反映されるようになるのも唐鏡の特徴のひとつとされる。唐鏡は遣唐使などを通じて日本にも将来されており、正倉院に海獣葡萄鏡が収蔵されているのは、その代表的な例である。こうした事例は、唐の国際性を表すとともに、唐鏡の価値の高さを物語っていると言えるだろう。

21. 双鳳文八花鏡（蔵品番号285）

直径15.6cm、重量620g、唐

鏡形は八花形で、鏡背は内区と外区に分かれる。内区は鈕をはさんで左右に2羽の鳳凰が施される。鈕の上下にもなんらかの施文があるが不明瞭である。外区には、花文や昆虫文が施されるが一部は不明瞭。

22. 月兎八稜鏡（蔵品番号286）

直径14.9cm、重量670g、唐

八稜形。鏡背は内区と外区に分かれる。内区には、楕円形の鈕を貫く形で桂樹が配される。鈕を挟んで内区右側には嫦娥が、内区左側には月兎と蟾蜍（ヒキガエル）が配されており、嫦娥奔月の故事をモチーフとしている。外区には８つの雲文が飾られる。鏡背には緑白色の錆が付着している。

23. 花卉鏡（蔵品番号122）

直径10.3cm、重量219g、唐

鏡背は内区と外区に分かれる。内区は、円鈕のまわりに蓮華座が施され、その外側には内向きの鋸歯文が巡る。内区外周には葡萄唐草文が巡る。外区には、斜行櫛歯文帯が１周し、その外側に鋸歯文帯が２周する。黄金色を呈し、金属光沢をもつ。

宋〜清鏡

宋代には銅鏡生産は衰退傾向にあり、質も唐代に比して低下していたとされる。その原因は銅禁や他の手工業の発展などが挙げられる。しかし、なお多くの銅鏡が生産された。また、経済の発展ならびにその中心地域の変化にともない、湖州など江南地域における民間の銅鏡生産が盛んになった。

さて、宋代には唐代のような豪奢な銅鏡は見られなくなり、図案の題材には花草・花鳥のほか、故事が採用されるようになった。また、形式も亜字形など多種多様なものが見られる。本書に収録したものでは、28の纏枝花文亜字形鏡などを挙げることができる。一方で、実用性が重視されるようになり、27の素文八花鏡のような素文の銅鏡が多く生産された。

さらに、宋鏡の大きな特徴として鋳鏡者銘が挙げられる。これは鏡背に「湖州真石家念二叔照子」のように、州名・鋳鏡者名ならびに「照子」（あるいは「照子記」）などの銘が入るものである。本書にてとりあげたものでは26の方鏡が挙げられる。

続く元代の銅鏡は宋鏡に比べて大型化するが、質の低下がさらに進み、また数量も減少するなど、銅鏡生産のさらなる衰退が指摘される。図案は仏教の影響が特徴とされる。銘文に鋳鏡者名が記されることは宋鏡に比して少なく、紀年や吉祥語が多く見られ、また１行のみの簡略なものが多い。

明代の銅鏡生産は宋元時代より盛んになり、生産数も宋代に匹敵し、質も高まった。一方で、清代の銅鏡は一般に明鏡よりも質が劣るとされる。ただし、乾隆年間に内務府で生産された銅鏡は質の高さが指摘される。明清銅鏡に共通する特徴として、形態では円鏡や方鏡が、文様や銘文では吉祥文様や吉祥語銘が増加する。この時期の吉祥語銘を有する銅鏡としては、35の厚徳栄貴銘鏡などの一族の繁栄や長寿を願ったものや、33の状元及第銘鏡などの科挙に関するものを挙げることができる。また、32の素文鏡など、鈕部に紀年や鋳鏡者名などの銘文が鋳込まれるものも特徴とされる。

24. 都城銅坊銘葵花鏡（蔵品番号282）

直径15.3cm、重量486g、五代～北宋

　鏡背に、「都城銅坊　官　匠人倪謀」銘が鋳出されている。全体的に緑青に覆われており、鏡縁は腐食が進んでいる。

25. 素文六花鏡（蔵品番号123）

直径15.6cm、重量308g、宋

　無文。六花形。縁部が一部、破損している。鏡背に銘があるが、摩滅のため判読できない。

26. 湖州銘方鏡（蔵品番号176）

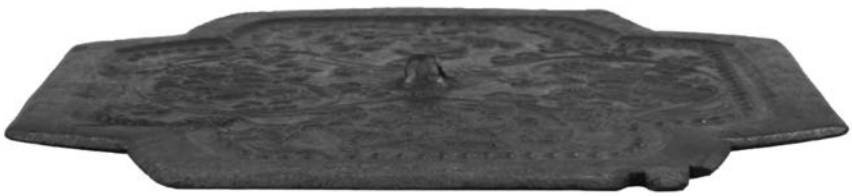
長12.2cm、重量281g、宋

鏡背に６字×２行の銘文を確認できる。１行目冒頭２字は「湖州」と考えられ、その他は摩滅が激しく判読が難しい。鈕は欠損している。緑色ならびに褐色の錆が広く付着している。

27. 素文八花鏡（蔵品番号230）

直径10.4cm、重量80g、宋

　無文。八花形。内区と外区に分かれる。全体的に銀白色を呈するが、一部緑青が付着している。



28. 纏枝花文亜字形鏡（蔵品番号274）

直径11.5cm、重量114g、宋

亜字形。鏡縁に欠損が見られる。鏡縁の内側に連珠文帯をめぐらせ、その内部に纏枝花文を配する。

29. 纏枝花文亜字形鏡（蔵品番号115）

直径11.4cm、重量110g、宋～金

亜字形。鈕は破損している。連珠文の内部に纏枝花文を配する。文様の一部が摩耗している。後世の研磨を受け、鏡背・鏡面ともに赤味がかった黄金色を呈している。

30. 素文鏡（蔵品番号134）

直径10.9cm、重量339g、明～清

　無文。鈕頂部に「□□□造」銘が施されている。

31. 素文鏡（蔵品番号259）
直径8.2cm、重量174g、明～清

32. 薛恩渓造銘素文鏡（蔵品番号260）
直径9.5cm、重量233g、明～清

33. 状元及第銘鏡（蔵品番号203）

直径9.6cm、重量122g、明～清

一周の凸線により内区と外区に分かれる。鈕を囲むようにして、凸線で「状元及第」銘が施される。さらに、銘文各字を方格が囲む。鈕頂部や銘文凸線の頂部などは磨かれており、黄金色を呈している。

34. 三元連中銘鏡（蔵品番号211）
直径7.6cm、重量45g、明～清

35. 厚徳栄貴銘鏡（蔵品番号214）
直径7.5cm、重量39g、明～清

１－２　朝鮮鏡（高麗）

高麗とは918年から1392年まで朝鮮半島を統治した国家であり、仏画や青磁など、その工芸技術の高さでよく知られている。鏡を始めとする金属工芸もまた、この時代を特徴づける物質文化のひとつである。

高麗の鏡には、37の七宝文鏡のように、高麗独自に制作されたと考えられているもの、中国や日本など周辺諸国からもたらされた舶載鏡、また40や41の瑞花双鳳文八稜鏡のように、これらの鏡を踏み返したと考えられるもの、あるいは模倣したと考えられるものが含まれる。そのため、周辺諸国の鏡と類似した形状のものも多く、高麗製造であると見分けるのに困難を生じることも多い。その一方、形状・文様を同じくしながらも、鏡胎の厚さや色調などの点で、諸外国のものとは違いが見られると言われる。また近年では高麗古墳からの出土鏡も増えており、研究が進められつつある。鏡の形状については、円形、方形、八花鏡、八稜鏡、五花鏡のほか、柄鏡や、釣鐘形の懸鏡など、様々なものが確認されている。高麗鏡は、日本国内でも比較的多くのコレクションがあり、東京国立博物館、京都国立博物館、大阪歴史博物館、東京藝術大学、東京大学教養学部美術博物館を始め、複数の機関で収蔵されている。本コレクション中にも、10数点の高麗鏡が収蔵される。

高麗鏡は上述のように、中国や日本の鏡を踏み返したたがために、これらと文様が共通する一方、銅質という点では中国・日本のそれとは異なり、緑白色を呈することが指摘されている。しかしながら、このような色調の違いが、金属成分の違いに由来するのか、あるいはまた別の要因に起因するのかという点については、現状では未解明である。実際のところ、本コレクションにおいても、40の瑞花双鳳文八稜鏡や龍樹殿閣鏡（蔵品番号303）は、淡緑色の錆に覆われている。また本コレクションの特徴として、コレクション中の多くの鏡の鏡背が磨かれており、錆の下の金属本来の部分が見えているのであるが、高麗鏡と思われる資料に共通する特徴として、いずれも赤味を帯びた黄金色を呈するという点が指摘できる。また本コレクションの高麗鏡の中には、多数の鋳巣が確認できるものもあり、一口に高麗鏡と言っても、鋳造技術上の優劣差が存在したであろうことを見て取ることができる。

36. 四宝花文鏡（蔵品番号253）

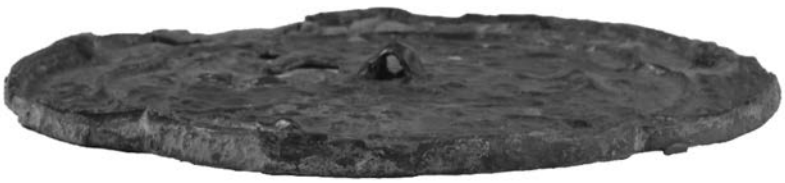
直径14.1cm、重量335g、高麗

蓮華文の鈕座に、半球状の鈕をもつ。内区に花文を施す。外区は無文。縁部の断面形は丸みを帯びた三角形で、鏡縁高約 4 mm。鏡背には、多数の鋳巣が確認できる。鋳巣の大きさは最大で直径約 3 mm。鏡背は錆落としがされている。赤味がかった黄金色を呈し、金属光沢をもつ。一方、鏡面側は全面が緑色の錆に覆われている。

37. 七宝文鏡（蔵品番号155）

直径10.6cm、重量45g、高麗

鏡背に七宝文を施す。蓮華文の鈕座に、その周囲には連珠文を巡らせている。鏡胎は非常に薄い。平縁で、鏡縁高は約0.8mm。鏡胎はさらに薄い。鈕及び縁部の一部が欠損している。鈕座附近には、長径10mm短径８mm程の楕円形の穴が開いており、鏡面側からこれを補鋳したと思われる箇所がある。鏡背は錆落としがされており、赤味がかった黄金色を呈し、金属光沢をもつ。一方鏡面は緑褐色の錆に覆われる。高麗初期に見られる、ごく薄い七宝文鏡のひとつであると考えられる。



38. 瑞花鴛鴦文五花鏡（蔵品番号159）

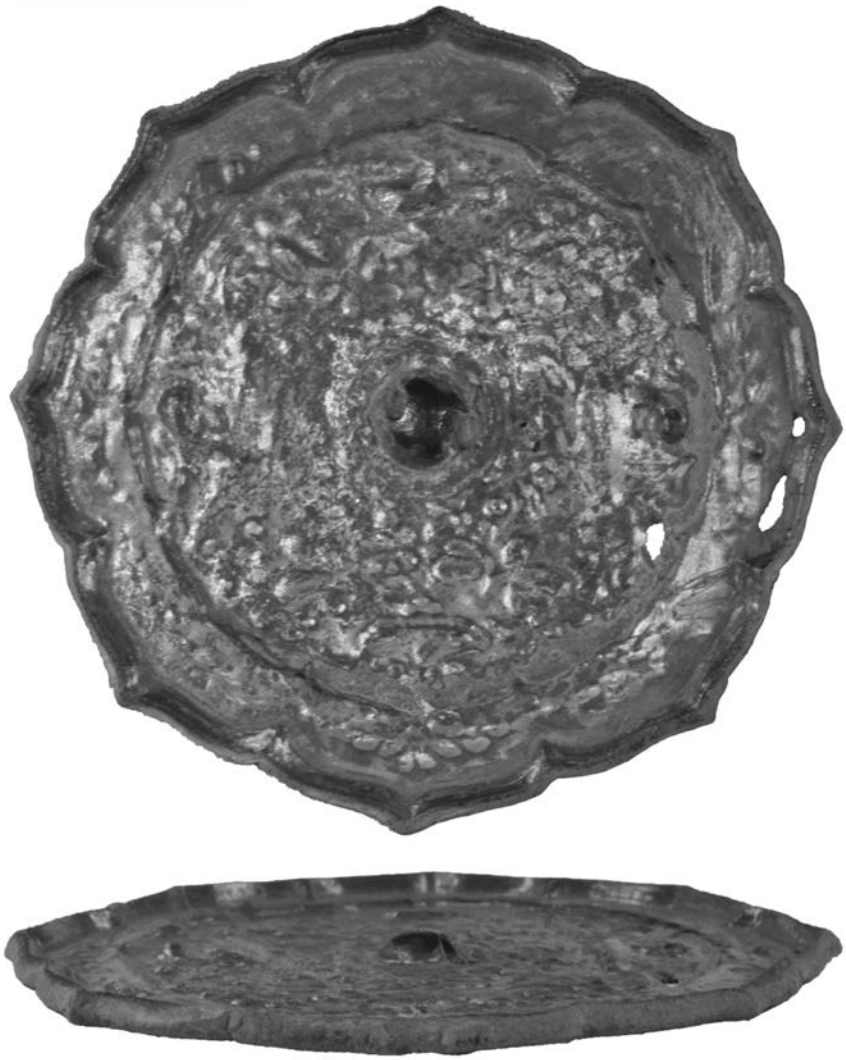
直径10.6cm、重量98g、高麗

蓮華文鈕座をもつ。文様は大部分が摩滅しているが、鏡本体の形状および現状残る文様の凹凸からは、外区に２羽の鴛鴦を向かい合わせに配置し、それ以外の箇所は瑞花文で埋められていると推測される。鏡胎は厚み１mmほどで薄く平らである。一部は欠損する。縁部は高く立ち上がる。鏡縁高3.5～5.0mm。鏡背は錆落としがされており、赤味がかった黄金色を呈する。鏡面は全体的に緑褐色の錆に覆われている。平安時代後期の和鏡に原型がある。

39. 素文六稜鏡か（蔵品番号160）

直径12.4cm、重量70g、高麗

鏡背は磨かれて、文様はほぼ完全に摩滅しており、わずかに縁部の形が見て取れる。鏡背側外区に長径12mm短径７mmほどの楕円形の鋳掛のような痕跡が見られる。鏡背・鏡面ともに赤味がかっており、金属光沢を有する。



40. 瑞花鴛鴦文八稜鏡（蔵品番号154）

直径11.3cm、重量94g、高麗

半球状の鈕をもつ。鏡胎はやや薄く、厚さ約１mm、一部欠損している。縁部は断面が三角形を呈し、高く立ち上がる。鏡縁高４mm。内区文様は摩滅が激しいが、２羽の鴛鴦（頭部と羽）が見られる。外区文様は、摩滅のため不鮮明。鏡背は赤味がかった黄金色を呈し、金属光沢をもつ（錆落としがされている）。一方、鏡面及び側面は全面が淡緑色の錆に覆われている。和鏡を原型とする。

41. 瑞花双鳳文八稜鏡（蔵品番号157）

直径13.0cm、重量93g、高麗

鈕は欠損。蓮華文の鈕座をもつ。鏡胎は薄く、その一部は欠損している。平縁で鏡縁高は約１mm。鏡胎はこれよりさらに薄い。鏡背の内区上下に瑞花、左右に２羽の鳳凰を施す。外区にも施文が見られるが、摩滅のため、不鮮明である。鏡背は赤味がかった黄金色を呈し、金属光沢をもつ（錆落としがされている）。鏡面側は緑褐色の錆に覆われる。平安時代の和鏡を原型とする。

42. 四宝花文鏡（蔵品番号180）

直径13.8cm、重量200g、高麗または宋

鈕は半球状に近いが、頂部がやや平らになっている。鈕の頂部には穿孔のようなものが見られる。縁部の断面形は台形であり、鏡縁厚は2.5～3mm。鈕座は「花蕊」形。外区に花文を施す。外区文様は36と同じであるが、本器では葉脈が凹線で表現されるなど、表現が36よりやや細かい。鏡背は緑褐色の錆が付着している。鏡面の多くも緑色の錆に覆われるが、一部赤味がかった黄金色を呈する。

43. 素文八花鏡（蔵品番号158）

長さ9.9cm、重量56g、高麗または宋

八花形の無文の鏡。平縁で、鏡縁高は１mmに満たない。鈕は半球状に近く、その頂部がやや平らになっている。鏡背・鏡面ともに赤味がかった黄金色を呈しており、金属光沢を有する。表面はやや黒ずんでいる。

１－３　和鏡

日本における鏡の始まりは弥生時代に遡る。この時期、中国大陸からもたらされた漢様式の舶載鏡が、権威の象徴として、北部九州を始めとする各地域の首長の墓に副葬された。古墳時代になると、これらを模倣して製作された仿製鏡や、あるいは日本独自の文様をもった鏡が製作されるようになる。その後の飛鳥・奈良時代には、主に仏教の伝播・隆盛を通じて、引き続き大陸、特に唐式鏡を受容していく。

平安時代になると、瑞花鳳凰文八稜鏡など、中国の影響を受けながらもこれを脱却し、向かい合う二羽の鳥を配し、その背景には草花を配したり、一幅の絵画の如く、風景をモチーフとするなど、日本独自の鏡文様が成立するとされる。「長寿」や「繁栄」の願いを込めた鶴や亀、菊文などを取り入れ、和鏡様式が確立していく。例えば、本コレクション中、44の亀甲菊花双雀文鏡（室町後期）もその一端として位置付けられよう。

このようなめでたいモチーフを鏡文様とすることは、時代が下った江戸時代にも継承される。本コレクションに含まれる和鏡の大部分は当該期の柄鏡であるが、その鏡背文様として、いずれも鶴や亀、松、南天などが配される。また江戸後期になると、鏡は踏み返し鋳造により大量生産されるようになり、その利用は一般庶民にも広がっていった。この時期、鏡は婚礼道具としても多く用いられ、「高砂」など、おめでたい大文字入り鏡が量産された。明治時代に入り、現在も用いられているガラス製の鏡が製作されるに至り、古代以来の銅鏡文化は終焉を迎えることになる。

44. 亀甲菊花双雀文鏡（蔵品番号163）

直径11.1cm、重量340g、室町後期

亀甲形鈕で、その甲羅には花亀甲文が施される。高い圏線をもつ。直角式高縁。鏡縁高10mm。内区・外区ともに花亀甲文を充填する。その上には双雀文を配す。鏡背・鏡面ともに緑褐色を呈する。この形式の鏡は、室町時代の日本で製作されたが、これと並行する時期の朝鮮半島（高麗）においても、これを踏み返して同形の鏡が製作された。本コレクションの中では、38、40、41なども同じく、和鏡に原型をもつ高麗鏡である。

45. 竹梅文柄鏡（像品番号164）

全長25.0cm、直径16.4cm、重量315g、江戸中期

柄付き（長8.7cm 幅2.5cm）で、直角式低縁。鏡縁高約2.5mm。鏡背には竹と梅を中心とする図柄が施される。鏡背の全面に「寿」銘、左隅には 「藤原周重」の鏡師名が見られる（中野1969によれば、江戸中期の鏡師）。本コレクションの柄つき和鏡の中では、柄が細長く、比較的早い時期のものであることが分かる。また、鏡背は淡い黄金色、鏡面は銀白色を呈する。側面及び鏡縁も銀白色だが、表面の削れた箇所は淡い黄金色を呈する。いずれも金属光沢をもつ。

46. 松竹鶴亀文柄鏡（蔵品番号165）

全長27.8cm、直径17.9cm、重量406g、江戸中期

柄付き（長9.7cm 幅3.4cm）で、蒲鉾式直線縁。鏡縁高約3.9mm。松・竹及び鶴・亀を配する。左端に「藤原光永」の鏡師名が見られる。鏡背は鈍い黄金色、鏡面は銀白色を呈する。両面ともに金属光沢をもつ。鏡面側にはところどころ緑色の錆が見られる。

47. 松南天鶴亀文柄鏡（蔵品番号166）

全長27.7cm、直径18.1cm、重量403g、江戸中期

柄付き（長9.5cm 幅3.2cm）で、蒲鉾式直線縁。鏡縁高約3.7mm。鏡背右端に「藤原光長」の鏡師名が見られる。鏡背は黄金色、鏡面は銀白色を呈する。両面ともに金属光沢をもつ。

48. 松竹鶴亀文柄鏡（蔵品番号167）

全長26.7cm、直径17.7cm、重量455g、江戸中期か

柄付き（長8.9cm 幅3.2cm）で、蒲鉾式直線縁。鏡縁高約4.2mm。鏡背の全面に「高砂」、左端には「天下一河嶋伊賀重永」銘が見られる。鏡背は黄金色、鏡面は銀白色を呈する。両面ともに金属光沢をもつ。

49. 松鶴文柄鏡（蔵品番号168）

全長31.0cm、直径21.9cm、重量646g、江戸後期

柄付き（長9.8cm 幅3.8cm）で、蒲鉾式直線縁。鏡縁高約4.2mm。鏡背全面に「須磨」、左端に「天下一津田和泉掾吉長」の鏡師名が見える。江戸後期の鏡師とされる。鏡背のうち「須磨」銘以外は赤銅色、「須磨」銘及び鏡縁・側面・鏡面は銀白色を呈する。いずれも金属光沢をもつ。鏡背・鏡面ともに、銀白色の下に赤銅色が見えつつある箇所が散見され、赤銅色の本体の上に、銀白色の金属薄膜加工を施していると推測される。

50. 松竹鶴亀文柄鏡（蔵品番号169）

全長30.4cm、直径21.3cm、重量706g、江戸中後期

柄付き（長9.3cm 幅3.7cm）で、蒲鉾式直線縁。鏡縁高約4.6mm。鏡背全面に「高砂」、左端に「天下一藤原吉次」の鏡師名がある。江戸中後期の鏡師とされる。鏡背は黄金色、鏡面はところどころやや黄色味がかった銀白色を呈する。黄金色の本体の上に、銀白色の金属薄膜加工を施したと推測される。両面ともに金属光沢をもつ。

51. 松竹梅鶴亀文柄鏡（蔵品番号170）

全長34.7cm、直径24.4cm、重量1460g、江戸後期か

柄付き（長10.3cm 幅4.8cm）で、内傾式中縁。鏡縁高5.5mm。鏡背左端に「天下一津田薩摩守永繁」の鏡師名が見られる。鏡背は赤味がかった黄金色、鏡面はところどころやや赤味を帯びた銀白色。鏡面側のごく一部に黄金色が見えている。黄金色の本体の上に、銀白色の金属薄膜加工を施したと推測される。両面ともに金属光沢をもつ。

52. 鶴亀文方鏡（蔵品番号262）

縦11.6cm、横6.5cm、重量116g、江戸中後期

方形鏡。鏡背には鶴と亀を配する。「山城住藤原政重」の鏡師銘が見られる。鏡背は黄金色、鏡面は銀白色で両面ともに金属光沢をもつ。鏡背の上下に２つの鈕をもつが、鈕孔は鋳出されていない。鏡縁の断面形は三角形を呈する。鏡縁厚2.5mm。懐中鏡。

53. 桐樹・鉄線文鏡（蔵品番号200）

直径10.8cm、重量91g、江戸中期か

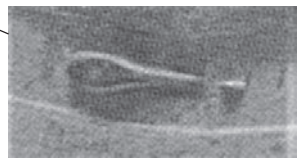
鈕はない。鏡背に桐樹文及び鉄線文様を施す。梨地。鏡師名として「光永」銘が見られる。藤原光永を指すか。鏡背・鏡面ともに鈍い黄金色を呈し、金属光沢をもつ。

2　帯鉤

帯鉤とは、古代中国で用いられた帯止め用の金具である。おおよそ東周時代から魏晋南北朝時代にかけて、中国全土で使用された服飾具である。帯鉤本体の裏面には鈕、本体先端部は鉤状の作りをしており、これらを、孔を開けたベルトに通すことで、ベルトの装着に用いたとされる。その素材としては、玉製、鉄製、青銅製などのものが見つかっている。

本コレクションにも14点の青銅製帯鉤が収蔵される。その形状は、琵琶形（１～３）、匙形（４）、獣形帯鉤（５）のほか、棒形などもある。これらはいずれも鋳造品であるが、その表面にはしばしば、４・５の琵琶形帯鉤のように金糸・銀糸の象嵌や、６の匙形帯鉤のようにトルコ石の象嵌が見られたり、また７の獣形帯鉤のように、金製の金属薄膜加工が施される。いずれも東周時代に広く用いられる金工技法である。帯鉤は、数cm～10数cmの小さな金工品ではあるものの、当時最先端の金属工芸技術が集積されたものであると言えよう。

１．琵琶形帯鉤（蔵品番号335）
長さ7.1cm、重量13g、東周



兵馬俑坑出土の戦袍軍吏俑（左）とその帯留（上）
（世田谷美術館ほか1994：32より転載）

2．琵琶形帯鉤（蔵品番号227）
長さ16.9cm、重量82g、東周

3．琵琶形帯鉤（蔵品番号340）
長さ4.9cm、重量21g、東周

4．琵琶形帯鉤（蔵品番号225）
長さ7.8cm、重量36g、東周～漢

5．琵琶形帯鉤（蔵品番号228）
長さ9.6cm、重量99g、東周～漢

6．匙形帯鉤（蔵品番号226）
長さ5.2cm、重量35g、東周

7．獣形帯鉤（蔵品番号221）
長さ8.5cm、重量42g、東周

3　鈴

本コレクションには、銅鈴９点が収蔵される。古代中国における鈴形器の始まりは新石器時代の黄河流域で作られていた土製鈴にあり、中国における礼楽制度を体現したものとされる。その後、銅製の鈴が、新石器時代後期（山西省陶寺遺跡）、さらに夏代（河南省二里頭遺跡）の遺跡から出土するようになる。殷代以降、鈴は多数見られるようになる。装飾品として腰に佩びたり、死者に殉じて埋葬される犬（殉犬）の顎下や、車馬を埋めた車馬坑内の馬の顎下から出土するなど、その役割は変わっていったとされる。一方で、祭祀具としての楽器は、鐃あるいは鐘（編鐘）、鎛などがその役割を担っていくことになる。

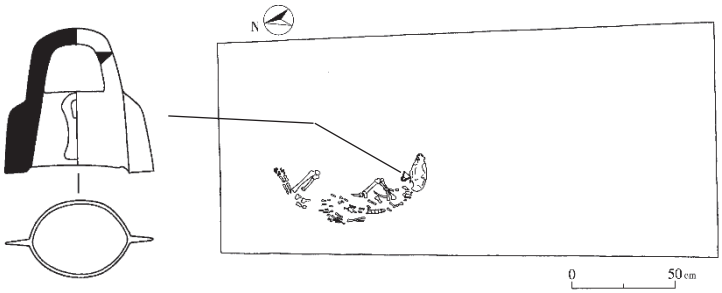
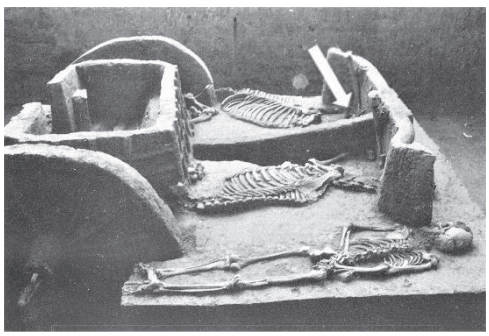


図１　墓内に殉葬された犬の首元から出土した銅鈴（殷墟孝民屯遺跡SM107号墓）
（出典：中国社会科学院考古研究所2018：図２-148B及びC）



▲白矢印の先が銅鈴出土位置

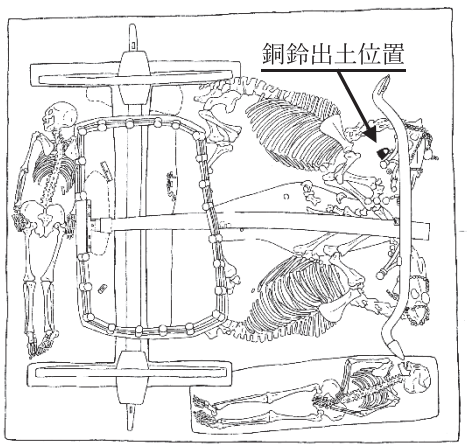


図２　車馬坑内の馬の首元から出土した銅鈴（殷墟郭家荘遺跡52号車馬坑）
（出典：中国社会科学院考古研究所1999：図100及び図版128-1）

1．鈴（蔵品番号350）
幅2.6cm、高さ3.0cm
殷～西周

2．鈴（蔵品番号345）
幅2.4cm、高さ2.9cm、重量６g
西周

3．鈴（蔵品番号349）
幅2.6cm、高さ3.0cm、重量８g
西周

4．鈴（蔵品番号347）
残幅2.8cm、高さ3.0cm、重量10g
西周～東周

5．鈴（蔵品番号348）
幅3.1cm、高さ3.3cm、重量11g
西周～東周

6．鈴（蔵品番号351）
幅2.2cm、高さ2.9cm、重量７g
西周～東周

7．鈴（蔵品番号344）
幅4.5cm、高さ3.3cm、重量９g
東周

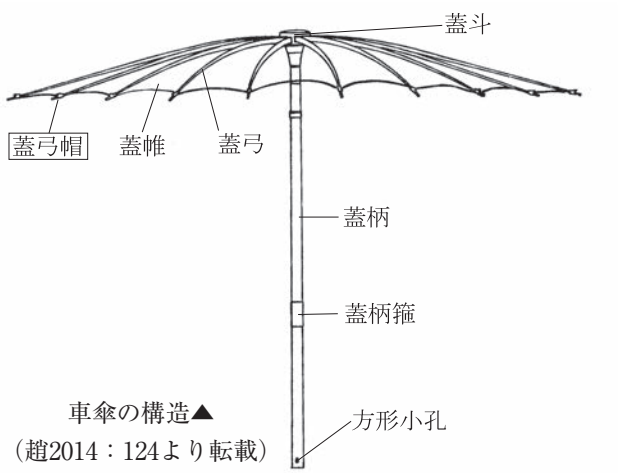
8．鈴（蔵品番号346）
幅4.3cm、高さ3.3cm、重量10g
東周

9．鈴（蔵品番号343）
幅6.6cm、高さ4.5cm、重量18g
漢

4　車馬器

中国における馬車利用の歴史は、これまでのところ、殷後期にまで遡る。殷周時代の遺跡からは、前頁にもあるように、多くの車馬坑が発見されている。車の部品や飾り金具、また馬具には青銅製品が用いられた。

本コレクションでは、蓋弓帽１点を収蔵する。これは、車傘の蓋弓の先端に付けられた飾り金具であり、鈎状になっている「棘爪（きょくそう）」部分に、車蓋の帷を留め、帷を蓋弓上に張ったとされる。



車傘の構造▲
（趙2014：124より転載）

秦始皇帝陵出土２号銅車馬
（東京国立博物館ほか2015：154より転載）

蓋弓帽
長さ7.9cm、重量21g、戦国
蔵品番号331-2
下半分は不正五角形の断面で中空、上半分は正八角形の断面形をもつ。表面はほぼ淡緑色に変色しているが、一部、銀白色を呈する箇所もある。完形。

林コレクション蔵品目録

注）本目録は、学習院大学国際センターの所蔵する林コレクション357点の目録である。本書の「凡例」で述べたとおり、本コレクションについては、すでに『学習院大学蔵中国青銅図録』（学習院大学国際研究教育機構、2018年）が出版されている。当図録中には、中国鏡134点が掲載されているが、当図録に掲載された器物の名称・時代については、基本的に当図録に従った。

1．鏡

蔵品番号	名称	時代	直径（mm）	重量（g）	備考	旧管理番号	『学習院鏡』
1	素文鏡	戦国か	75	55		T101	−
2	羽状地文鏡	戦国？	87	60		T080	4
3	変形羽状地文鏡	戦国	78	72	6片に割れている（未接合）	T095	−
4	雷雲文鏡	戦国？	136	276	8片に割れたものを接合	T086	5
5	連弧文鏡	秦	202	341	ひびあり	T003	2
6	連弧文蟠螭文鏡	前漢前期	108	79	多数に割れたものを一部接合	T132	8
7	蟠螭菱文鏡	戦国？	93	45	多数に割れたものを接合、縁部に直径約1.5mmの穿孔あり	T022	−
8	蟠螭文鏡	前漢前期	119	103	3片に割れたものを接合	T061	10
9	蟠螭文鏡	前漢前期	109	124	7片に割れたものを接合	T053	13
10	蟠螭文鏡	前漢前期	91	41	鏡縁が一部欠損、文様はやや不鮮明、鏡面は緑青で厚く覆われる	T131	12
11	渦状虺文鏡	前漢前期	84	27	2片に割れたものを接合、鈕座の一部を欠く	T040	11
12	渦状虺文鏡	前漢前期	96	47	2片に割れたものを接合	T041	−
13	渦状虺文鏡	前漢前期	115	122		T052	−
14	渦状虺文鏡	前漢前期	90	52		T001	−
15	渦状虺文鏡	前漢前期	96	62	3片に割れたものを接合	T024	−
16	渦状虺文鏡	前漢前期	92	51	鏡面の一部に緑青	T055	−
17	渦状虺文鏡	前漢前期	89	45		T056	−
18	虺龍文鏡	前漢中期～後漢前期	89	130	4片に割れたものを接合、一部欠損	T030	−
19	虺龍文鏡	前漢中期～後漢前期	79	80	器物全面が緑青に覆われている	T036	−
20	虺龍文鏡	前漢中期～後漢前期	64	46		T057	−
21	虺龍文鏡か	前漢？	57	26	文様不鮮明	T104	−
22	虺龍文鏡	前漢後期	101	213		T020	−
23	星雲文鏡	前漢中期	106	142	2片に割れたものを接合	T016	31
24	星雲文鏡	前漢中期	73	85	2片に割れたものを接合、文様やや不鮮明、鏡面の一部に緑青が生じている	T034	−
25	星雲文鏡	前漢中期	101	164	文様不鮮明	T046	−
26	星雲文鏡	前漢中期	131	355	2片に割れたものを接合、文様鮮明、やや緑青が生じている	T081	−
27	方格銘帯鏡	前漢前期	77	43		T028	22
28	方格銘帯鏡	前漢前期か	67	25	ひびあり	T051	19

蔵品番号	名称	時代	直径（mm）	重量（g）	備考	旧管理番号	『学習院鏡』
29	方格銘帯鏡	前漢前期か	79	42		T060	20
30	草葉文鏡	前漢中期か	111	138	３片に割れたものを接合	T067	28
31	草葉文鏡	前漢中期	138	272	８片に割れたものを接合	T011	25
32	草葉文鏡	前漢中期	97	82	文様不鮮明	T150	26
33	異体字銘帯鏡	前漢後期	65	55		T147	43
34	異体字銘帯鏡	前漢後期	79	107	３片に割れたものを接合	T149	39
35	異体字銘帯鏡	前漢後期	100	221		T021	36
36	異体字銘帯鏡	前漢後期	76	58	文様・銘文やや不鮮明、表面に緑青付着	T035	40
37	異体字銘帯鏡	前漢後期か	84	79	文様・銘文不鮮明、ひびあり	T065	42
38	異体字銘帯鏡	前漢中後期	102	188		T072	34
39	異体字銘帯鏡	前漢中後期	69	41	文様・銘文やや不鮮明、ひびあり	T058	－
40	異体字銘帯鏡	前漢中後期	106	182		T082	33
41	異体字銘帯鏡	前漢中後期	117	261		T092	38
42	異体字銘帯鏡	前漢中後期	114	188	鏡面は褐色の錆に覆われる	T069	35
43	異体字銘帯鏡	前漢中後期	102	142	鏡面は緑青に覆われる	T123	32
44	家常貴富銘鏡	前漢後期	77	70		T029	49
45	家常貴富銘鏡	前漢後期	76	57		T033	50
46	蟠螭文方格規矩鏡	前漢前期	127	166	11片に割れたうち10片を接合（１片のみ未接合）	T015	17
47	草葉文方格規矩鏡	前漢中期	158	325	一部褐色の錆に覆われる部分とがある	T039	30
48	方格銘帯鏡	前漢前期	84	59	４片に割れたものを接合	T142	21
49	方格光芒文銘帯鏡	前漢前期	71	36		T050	18
50	渦状虺文鏡	前漢前期	79	48	ひびあり	T059	24
51	異体字銘帯鏡	前漢後期か	64	35		T148	44
52	異体字銘帯鏡	前漢後期	122	241	両面ともに一部褐色及び淡緑色の錆が見られる	T014	37
53	圏帯四乳花弁鏡	前漢前期か	167	363	複数片に割れたものを接合、ひびあり、鏡背・鏡面ともに一部緑青が生じている	T062	－
54	細線式獣帯鏡	前漢後期～新	186	1027	両面ともに銀白色～淡い黄金色	T063	69
55	四乳禽獣文鏡	前漢後期か	112	278	２片に割れている（未接合）	T079	－
56	四乳雲雷文鏡	前漢後期	66	43	２片に割れたものを接合	T141	48
57	禽獣文規矩鏡	前漢後期	138	343	３片に割れている（未接合）	T074	－
58	方格規矩鏡	新	129	402		T013	57
59	方格規矩鏡	前漢後期	97	134	５片に割れたものを接合、鏡面の半分に緑青が生じている	T146	53
60	方格規矩四神鏡	新～後漢前期	114	203	文様極めて鮮明、半分以上が補修	T124	－
61	方格規矩鏡	前漢末期	106	269	４片に割れたものを接合、居摂年間の作	T120	54
62	尚方作方格規矩鏡	新	137	431		T133	60
63	方格規矩四神鏡	後漢前期か	157	360	２片に割れたものを接合、一部欠損、一片は両面ともに緑青が生じている	T038	－

蔵品番号	名称	時代	直径（mm）	重量（g）	備考	旧管理番号	『学習院鏡』
64	方格規矩四神鏡	後漢	177	816	全面緑青に覆われる	T009	−
65	方格T字鏡	後漢後期	93	85	建安後期の作	T049	118
66	方格T字鏡	後漢中後期	91	96		T115	115
67	方格T字鏡	前漢中後期か	91	114		T116	116
68	四乳T字文鏡	不詳	72	71		T102	117
69	尚方作細線式獣帯鏡	後漢前期	128	315	腐食している個所が多い	T010	71
70	四乳四神鏡	後漢前期	99	182	文様は明瞭、鏡背・鏡面ともに緑青が激しい、厚い錆膨れが散見される	T017	−
71	四乳八禽文鏡	後漢後期か	71	96	一部に淡緑色の緑青が生じている	T027	−
72	四乳八禽文鏡	不詳	102	168	後漢鏡の踏み返しか、鏡面の一部に緑青が生じている	T112	−
73	四乳四禽文鏡	後漢後期	86	132	２片に割れたものを接合、緑青が生じている	T042	−
74	内行花文鏡	後漢中期	90	145	４辺に割れたものを接合	T070	−
75	内行花文鏡	後漢	96	212		T118	−
76	異式鏡	後漢	70	56	２片に割れたものを接合	T100	130
77	変形四葉夔龍文鏡	後漢後期	92	94	一部に緑青が生じている	T071	−
78	獣首鏡	後漢中期	101	165	一部に緑青が生じている	T144	92
79	獣首鏡	後漢中期	103	114		T145	93
80	方格規矩鏡	不詳	139	434	一部に緑青が生じている	T140	59
81	方格規矩鏡	後漢前期	181	576	３片に割れたうち、２片を接合、ごく一部に緑青が見られる	T004	61
82	方格規矩鏡	後漢前期	189	552	４片に割れたものを接合、一部に淡緑色の緑青が見られる	T007	62
83	対置式神獣鏡	呉	121	268		T012	105
84	銘帯同向式神獣鏡	後漢後期	103	187	鏡面は腐食が進んでおり、ところどころ淡緑色の緑青が生じている、建安後期の作	T019	109
85	画文帯環状乳四神四獣鏡	後漢中期	125	307	欠損あり	T066	101
86	環状乳三神三獣鏡	不詳	97	219		T068	99
87	双頭龍文鏡	不詳	106	137	鏡背中央に鋳型の割れを転写したかのような凸線が走っている、文様はやや不鮮明	T018	121
88	双頭龍文鏡	後漢後期	80	93	ごく一部に緑青が生じている	T043	122
89	双頭龍文鏡	後漢後期	91	91		T044	123
90	富貴番昌銘龍虎鏡	後漢中後期	98	100		T064	85
91	内行花文鏡	後漢前期	185	562	４片に割れたものを接合	T008	87
92	内行花文鏡	後漢前中期	92	90	７片に割れたものを接合	T097	88
93	内行花文鏡	後漢前中期	93	108	ひびあり	T096	89
94	獣帯鏡	後漢後期	112	193	３片に割れたものを接合、一部に緑青が生じている	T026	75
95	双頭龍文鏡	後漢中期	103	114		T054	120
96	同向式神獣鏡	後漢後期	101	222		T025	111

蔵品番号	名称	時代	直径（mm）	重量（g）	備考	旧管理番号	『学習院鏡』
97	環状乳三神三獣鏡	不詳	88	176		T114	100
98	銘帯同向式神獣鏡	後漢後期	110	179	２片に割れたものを接合	T134	106
99	神人車馬画像鏡	後漢前期	216	992	複数片に割れたものを接合	T005	77
100	双頭龍文鏡	不詳	87	103	ひび及び欠損あり、一部に緑青が生じている	T143	－
101	三羊作盤龍鏡	後漢中期	118	262		T002	84
102	飛禽鏡	後漢後期	82	71		T037	124
103	飛鳥文鏡	後漢後期	63	48		T047	127
104	飛鳥文鏡	後漢後期	80	108		T127	126
105	逆S字唐草文鏡	三国魏	107	149		T031	128
106	双頭龍文鏡	後漢中期	77	75		T045	119
107	変形四葉文鏡	呉～西晋か	96	147		T125	－
108	連弧四葉文鏡	後漢前中期	104	192		T119	97
109	素文鏡	不詳	82	228		T135	－
110	素文鏡	不詳	82	169		T136	－
111	素文鏡	不詳	81	159		T137	－
112	素文鏡	不詳	91	248		T138	－
113	素文鏡	不詳	88	305		T139	－
114	政和二年銘単龍鏡	北宋	146	372		T006	131
115	纏枝花文亜字形鏡	宋～金	114	110	鈕欠損、文様は磨かれてやや摩滅している	T073	－
116	素文鏡か	宋か	133	224		T075	－
117	七宝文方鏡	宋	158	318	２片に割れている	T076	－
118	素文柄鏡	宋か	192	182		T085	－
119	乙亥年素文六花鏡	宋	145	287		T093	132
120	素文八花鏡	高麗	100	92	一部欠損あり	T098	－
121	不詳	不詳	81	69		T103	－
122	花卉鏡	唐	103	219	文様はやや摩滅している	T110	－
123	素文六花鏡	宋	156	308	銘文は摩滅のためほぼ判読不可、最後の文字は「造」	T094	－
124	纏枝花卉鏡	金か	119	132		T023	－
125	連弧文鏡	金か	95	142		T048	－
126	人物多宝鏡	明か	87	99		T126	－
127	南柘鍾記銘鏡	明～清	86	179		T111	－
128	素文鏡	江戸か	103	111	鏡背は梨地	T117	－
129	三元及第銘墨書鏡	明～清	162	292		T077	－
130	五子登科銘鏡	明～清	71	29		T099	－
131	昭武通宝銘鏡	清	49	23		T108	133
132	昭武通宝銘鏡	清	51	28		T109	134
133	素文鏡	明～清	116	369	鈕頂部に銘あり、摩滅のため判読不可	T089	－
134	素文鏡	明～清	109	339	鈕頂部に銘あり、摩滅のため判読不可	T128	－
135	異体字銘帯鏡	不詳	49	25	踏み返しか	T106	46

蔵品番号	名称	時代	直径（mm）	重量（g）	備考	旧管理番号	『学習院鏡』
136	四乳二神二獣鏡	後漢か	132	261		T078	−
137	方格規矩鏡	新か	166	572		T087	−
138	内行花文鏡	後漢か	98	143		T083	−
139	異体字銘帯鏡	後漢か	54	29		T105	−
140	四乳龍虎鏡	後漢か	88	139		T121	−
141	龍虎対峙鏡	後漢か	89	91		T122	−
142	重列式神獣鏡	不詳	129	470		T084	110
143	四乳四魚鏡	不詳	102	155		T113	−
144	瑞獣葡萄鏡	不詳	142	516	同封のメモに「伝大阪出土」とあり、文様不明瞭	T088	−
145	真子飛霜八花鏡	唐か	214	1360		T090	−
146	瑞獣葡萄鏡	不詳	53	60		T107	−
147	有柄人物故事鏡	宋か	214	290		T091	−
148	盤龍文八稜鏡	不詳	91	92		T129	−
149	纏枝菊花鏡	不詳	110	188		T130	−
150	瑞獣葡萄鏡	唐か	40	45		T151	−
151	草葉文鏡	不詳	178	908		T152	27
152	日有熹銘連弧文鏡	前漢中後期	151	580		T153	−
153	富貴宜孫銘変形四葉獣首鏡	後漢後期〜晋	191	870		T154	−
154	瑞花鴛鴦文八稜鏡	高麗	113	94	一部欠損あり	T155	−
155	七宝文鏡	高麗	106	45	一部欠損あり、中央に補鋳痕あり	T156	−
156	四乳鏡か	高麗か	95	118	鈕の一部及び文様が摩滅	T157	−
157	瑞花双鳳文八稜鏡	高麗	130	93	鈕摩滅、一部欠損あり	T158	−
158	素文八花鏡	高麗または宋	99	56		T159	−
159	瑞花鴛鴦文五花鏡	高麗	106	98	一部欠損あり、文様摩滅	T160	−
160	素文六稜鏡か	高麗	124	70	文様はすべて磨滅か	T161	−
161	素文八稜鏡	高麗	97	57		T162	−
162	素文八花鏡	不詳	87	72	同封のメモに「伝大阪出土」とあり	T032	−
163	亀甲菊花双雀文鏡	室町後期	111	340		T163	−
164	竹梅文柄鏡	江戸中期	長250 径164	315	「寿」及び「藤原周重」銘あり	T164	−
165	松竹鶴亀文柄鏡	江戸中期	長278 径179	406	「藤原光永」銘あり	T165	−
166	松南天鶴亀文柄鏡	江戸中期	長277 径181	403	「藤原光長」銘あり	T166	−
167	松竹鶴亀文柄鏡	江戸中期か	長267 径177	455	「高砂」及び「天下一河嶋伊賀重永」銘あり	T167	−
168	松鶴文柄鏡	江戸後期	長310 径219	646	「須磨」及び「天下一津田和泉掾吉長」銘あり	T168	−
169	松竹鶴亀文柄鏡	江戸中後期	長304 径213	706	「高砂」及び「天下一藤原吉次」銘あり	T169	−

蔵品番号	名称	時代	直径（mm）	重量（g）	備考	旧管理番号	『学習院鏡』
170	松竹梅鶴亀文柄鏡	江戸後期か	長347 径244	1460	「天下一津田薩摩守永繁」銘あり	T170	−
171	松竹鶴亀文柄鏡	江戸後期か	長337 径239	950	「高砂」及び「西村豊後掾藤原政重」銘あり	T171	−
172	円盤状銅器	不詳	151	242	一部欠損あり	T172	−
173	渦状蟠龍文鏡	不詳	107	130		S173	7
174	細線式獣帯鏡	後漢前期	121	144		S174	74
175	盤龍鏡	不詳	118	309	後世の模造品か	S175	−
176	湖州銘方鏡	宋	長122	281	鈕が欠損	S176	−
177	蟠螭文鏡	前漢前期	110	126		S177	15
178	異体字銘帯鏡	前漢後期	86	152	鏡背・鏡面ともに緑青が厚く付着	S178	47
179	方格規矩鏡	不詳	158	987		S179	58
180	四宝花文鏡	高麗または宋	138	200	鈕頂部に欠損あり、文様は摩滅してやや不鮮明	S180	−
181	黄羊作細線式獣帯鏡	後漢前期	163	411	半分を欠く	S181	72
182	吾作銘帯同向式神獣鏡	後漢後期	102	184		S182	108
183	吾作連弧四葉文鏡	後漢後期	120	270		S183	98
184	蟠螭文方格規矩鏡	前漢前期	110	115		S184	16
185	異体字銘帯鏡	前漢後期	67	34		S185	41
186	方銘四獣文系鏡	後漢中後期	82	54	4片に割れている	S186	95
187	虺龍文鏡	不詳	55	22		S187	−
188	四乳四禽文鏡	後漢前期	77	103		S188	−
189	百氏銘方格規矩鏡	後漢前期	135	343		S189	64
190	方銘三獣鏡	後漢中後期	86	68		S190	96
191	桼言銘方格規矩鏡	前漢	139	443		S191	56
192	双鸞文八花鏡	不詳	193	700		S192	−
193	莱氏銘方格規矩鏡	後漢前期	158	313		S193	65
194	尚方作方格規矩鏡	後漢前期	152	326		S194	63
195	画文帯神獣鏡	三国	155	−		S195	−
196	吾作方銘四獣鏡	後漢中後期	160	335		S196	94
197	漢有銘方格規矩鏡	前漢前期	154	605		S197	55
198	四乳八禽文鏡	不詳	93	181		S198	−
199	厚徳栄帰銘鏡	明	88	84		S199	−
200	桐樹・鉄線文鏡	江戸中期か	108	91	鈕なし、梨地、「光永」銘あり	S200	−
201	八花鏡	不詳	121	163	縁部に刻銘あり	S201	−
202	三元連中銘鏡	明〜清	59	21	鈕孔内に長さ5mmほどの鉄線が残存する（ネオジム磁石を近づけたところ、強い磁性が見られた）	S202	−
203	状元及第銘鏡	明〜清	96	122	文字がやや摩滅している	S203	−
204	虺龍文鏡	前漢後期	88	178		S204	−
205	菊花文方鏡	不詳	77	184		S205	−
206	環状乳神獣鏡	後漢後期	102	163		S206	102

蔵品番号	名称	時代	直径（mm）	重量（g）	備考	旧管理番号	『学習院鏡』
207	海獣葡萄鏡	不詳	90	218		S207	−
208	四乳四魚鏡	前漢か	106	124		S208	−
209	有銘素文鏡	明	85	87	銘は「正其□□□□□□」、馬蹄銀鈕	S209	−
210	湖州鏡	宋か	77	40	素文、有銘「湖州□□其□□□」、馬蹄銀鈕	S210	−
211	三元連中銘鏡	明〜清	76	45		S211	−
212	五子登科銘鏡	明〜清	90	122		S212	−
213	神仙人物鏡	明	80	148		S213	−
214	厚徳栄貴銘鏡	明〜清	75	39		S214	−
215	細線式四乳四神鏡	後漢前期	103	232		S215	70
216	四乳神人鏡	西晋〜東晋？	89	123	文様は錆のため極めて不鮮明	S216	112
217	環状乳神獣鏡	魏晋南北朝	123	220	２片に割れたものを接合	S217	−
218	人物鏡	明か	131	495		S218	−
219	四乳神人鏡	西晋〜東晋？	107	154		S219	113
229	星雲文鏡	前漢中期	100	161		S229	−
230	素文八花鏡	宋	104	80		S230	−
231	内行花文鏡	後漢	124	147	中央に大きくひび割れあり	S231	−
232	海獣葡萄鏡	不詳	138	1250		S232	−
233	海獣葡萄鏡	不詳	194	650		S233	−
234	仙鶴人物多宝鏡	明？	74	99		S234	−
235	内行花文鏡	後漢前期	141	275		S235	86
236	五子登科銘鏡	明〜清	68	35		S236	−
237	三山字文鏡	不詳	68	30		S237	−
238	海獣葡萄鏡	不詳	78	135	文様は極めて不鮮明	S238	−
239	鍍金龍文方鏡	唐？	110	298		S239	−
240	海獣葡萄鏡	不詳	72	140	文様は不鮮明	S240	−
241	袁氏作盤龍鏡	後漢前期	115	255	７片に割れたものを接合	X016	79
242	方格規矩鏡	不詳	87	109	模造品か	H001	−
243	四乳四禽文鏡か	不詳	83	171	文様は摩滅、鏡背面に金属薄膜あり	H002	−
244	四乳飛禽鏡	不詳	77	106.4		H003	125
245	内行花文鏡	後漢前中期	107	146		H004	90
246	盤龍鏡	後漢	117	279	３片に割れたものを接合、鏡背に鍍金	H005	−
247	双頭龍文鏡	不詳	110	208	赤銅色を呈する、模造品か	H006	−
248	盤龍鏡	後漢	107	173	中央に一部欠損あり	H007	−
249	四乳鏡	不詳	90	114	文様は摩滅、鏡背に鍍金	H008	−
250	方格規矩鳥文鏡	後漢中期	97	117		H009	−
251	獣帯鏡	後漢後期か	120	240		H010	76
252	方格規矩鳥文鏡	後漢前期	143	249		H011	66
253	四宝花文鏡	高麗	141	335	鋳巣多数、ひびあり、文様摩滅	H012	−
254	盤龍鏡	後漢前中期	127	326	複数片に割れたものを接合	H013	82
255	素文鏡	宋	77	177	有銘	H015	−

蔵品番号	名称	時代	直径（mm）	重量（g）	備考	旧管理番号	『学習院鏡』
256	素文鏡	明～清	83	154	鈕頂部に銘あり、摩滅のため判読不可	H016	－
257	素文鏡	明～清	76	137	鈕頂部に銘あり、摩滅のため判読不可	H017	－
258	素文鏡	宋か	81	251	鋳巣あり	H018	－
259	素文鏡	明～清	82	174	鈕頂部に「何□自造」銘あり	H019	－
260	薛恩渓造銘素文鏡	明～清	95	233	鈕頂部に「薛恩渓造」銘あり	H020	－
261	素文鏡	不詳	38	10	縁部に一部欠損あり	H021	－
262	鶴亀文方鏡	江戸中後期	縦116 横65	116	「山城住藤原政重」銘あり	H022	－
263	海獣葡萄鏡	不詳	41	51		H023	－
264	海獣葡萄方鏡	不詳	37	35		H024	－
265	双龍文鏡	不詳	111	259	鈕頂部に「元」銘、鏡背のみ鍍金	H025	－
266	百子千孫銘鏡	明～清	76	47		H026	－
267	四乳四獣鏡	不詳	85	112	文様は摩滅してやや不鮮明	H027	－
268	四葉文	不詳	74	41	文様は摩滅して不鮮明	H028	－
269	海獣葡萄鏡か	不詳	66	60	文様は摩滅して不鮮明、鏡背に鍍金	H029	－
270	四喜鏡	清	62	25	鏡背に鍍金か	H030	－
271	鏡	不詳	64	25		H031	－
272	渦状虺文鏡	前漢前期	76	29		H032	－
273	盤龍鏡	不詳	94	151		H033	－
274	纏枝花文亜字形鏡	宋	115	114	一部欠損あり	H034	－
275	四乳四禽文鏡	前漢後期	104	146	２片に割れたものを接合、文様凸線はやや不鮮明	H035	－
276	匕縁方格銘帯TV鏡	前漢前期	91	70	複数片に割れたものを接合	H036	23
277	異体字銘帯鏡	前漢後期	68	33	２片に割れている（未接合）、一部欠損	H037	45
278	四乳四禽文鏡	後漢前期	80	69		H038	73
279	素文鏡	不詳	93	243	「宮家包換青鏡」銘あり	H039	－
280	八鳳鏡	後漢中後期	109	140		H040	91
281	三山字文鏡	不詳	126	230		H041	－
282	都城銅坊銘葵花鏡	五代～北宋	153	486		H042	－
283	八鳳鏡	呉～西晋	140	366	ひびあり	H043	114
284	細線式獣帯鏡	後漢中期	166 （復元径）	残 202	破片（縁部及び外区の一部）のみが残存	H044	－
285	双鳳文八花鏡	唐	156	620	５片に割れたものを接合	H045	－
286	月兎八稜鏡	唐	149	670		H046	－
287	大明宣徳年製銘柄鏡	明	残長186 径149	171	柄の先は欠損	H047	－
288	星雲文鏡	前漢中期	101	170	２片に割れている	H048	－
289	海獣葡萄鏡	不詳	135	－		H049	－
290	画文帯環状乳神獣鏡	不詳	180	818	後漢～三国鏡の模造品か	H050	－
291	四乳四虺文鏡	漢	72	90		H051	－
292	細線式獣帯鏡	後漢前期	188	887		H052	68
293	内行花文鏡	後漢前期	119	190	鏡面中央が突出している	H053	－

蔵品番号	名称	時代	直径(mm)	重量(g)	備考	旧管理番号	『学習院鏡』
294	禽獣瑞花文鏡	唐	180	545	ひびあり	H054	−
295	虺龍文鏡	前漢後期	80	113		H055	−
296	雲文鏡	前漢か	93	133	4片に割れたものを接合	H056	52
297	蟠螭文鏡	前漢前期	121	111		H057	9
298	四乳雲文鏡	後漢中後期	75	67		H058	129
299	素文鏡	前漢前期	135	217	2片に割れたものを接合	H059	6
300	神獣鏡	魏晋南北朝	119	146		H060	103
301	胡氏盤龍鏡	後漢前中期	117	352		H061	80
302	池氏盤龍鏡	後漢前中期	111	267		H062	81
303	龍樹殿閣鏡	高麗	201	569	鏡背・鏡面ともに淡緑色の錆に覆われる、鏡面側にひびが見られる	H063	−
304	素文鏡	東周	81	33	3片に割れている、一部欠損あり	H064	1
305	方格規矩鏡	後漢前中期	143	402	2片に割れている	H065	−
306	方格規矩鳥文鏡	後漢前期	147	221	2片に割れたものを接合	H066	67
307	八乳波文鏡か	不詳	89	95		H067	−
308	銘帯同向式神獣鏡	呉	125	271		H068	107
309	草葉文鏡	前漢中期	107	107		H069	29
310	神仙騎獣文八稜鏡	唐	116	289		H070	−
311	双喜文柄鏡	清	長227 径141	186	「湖州薛□□造」銘あり、鏡背は黄金色、鏡面は銀白色、両面ともに金属光沢をもつ	H071	−
312	柄鏡	清か	長218 径119	501	文様は摩滅して不鮮明	H072	−
328	陽燧	周	48	16	周縁が一部欠損、扁平鈕、凹面、全面緑青に覆われる	H088	−
329	櫛歯文鏡	不詳	52	37	鈕を欠く	H089	−
330	連弧文鏡	後漢	71	残39	2片に割れている（未接合）、縁部の1/3を欠く	H090	−
331-1	陽燧	周	48	24	扁平鈕、凹面、全面緑青に覆われる	H091	−
332	渦文鏡	東周	76	55		H092	3
333	四神画像鏡	漢	178	448	2片に割れている（未接合）	H093	−
334	四葉蟠螭文鏡	前漢前期	134	200	6片に割れている（未接合）、一部欠損あり	H094	14
336	陽燧	周	71	67	鈕2つ、縁部に一部欠損あり	H096	−
337	花鳥文鏡	不詳	82	52	ひび及び一部欠損あり	H097	−
338	素文八花鏡	宋	96	57	一部欠損あり	H098	−
番号なし	盤龍鏡	後漢	111	−		H014	−

2．帯鉤

蔵品番号	名称	時代	長さ(mm)	重量(g)	備考	旧管理番号
220	獣形帯鉤	東周か	70	39		S220
221	獣形帯鉤	東周	85	42		S221

蔵品番号	名称	時代	長さ（mm）	重量（g）	備考	旧管理番号
222	獣形帯鉤	東周	127	51		S222
223	馬形帯鉤	不詳	110	64		S223
224	鳥形帯鉤	東周	40	25	銀及び銀糸象嵌あり	S224
225	琵琶形帯鉤	東周～漢	78	36	銀象嵌あり	S225
226	匙形帯鉤	東周	52	35	金糸及びトルコ石象嵌あり	S226
227	琵琶形帯鉤	東周	169	82		S227
228	琵琶形帯鉤	東周～漢	96	99	金銀象嵌あり	S228
331-3	帯鉤	不詳	64	19	全面を錆に覆われており、文様は不鮮明	H091
335	琵琶形帯鉤	東周	71	13	渦文をもつ	H095
339	帯鉤	不詳	43	23		H099
340	琵琶形帯鉤	東周	49	21	正面及び背面の一部に合范線が見られる	H100
341	匙形帯鉤	東周	71	15	渦文をもつ、黄金色を呈し、金属光沢をもつ、背面に活塊范の痕跡あり	H101

3．鈴

蔵品番号	名称	時代	幅・高（mm）	重量（g）	備考	旧管理番号
343	鈴	漢	幅66 高45	18	方格文及び乳丁文、舌あり、表面は一面は淡い黄金色の地金が見えている、もう一面は黒色に変色している	H103
344	鈴	東周	幅45 高33	9	凸線で幾何学文を施す、舌あり	H104
345	鈴	西周	幅24 高29	6	舌あり、表面は緑青に覆われており、文様は不鮮明	H105
346	鈴	東周	幅43 高33	10	舌あり、無文、表面は薄い緑青に覆われているが、一部金属面が見えており、黒灰色に変色していることがわかる	H106
347	鈴	西周～東周	残幅28 高30	10	舌あり、表面は緑青で覆われている、無文か	H107
348	鈴	西周～東周	幅31 高33	11	舌あり、表面は緑青で覆われている、無文か	H108
349	鈴	西周	幅26 高30	8	舌あり、両面に三角文、表面は緑青で薄く覆われている	H109
350	鈴	殷～西周	幅26 高30	–		H110
351	鈴	西周～東周	幅22 高29	7	舌あり、両面に方格文及び乳丁文、表面は緑青で薄く覆われている	H111

4．車馬器（蓋弓帽）

蔵品番号	名称	時代	長さ（mm）	重量（g）	備考	旧管理番号
331-2	蓋弓帽	戦国	長79	21	下半分は不正五角形、上半分は正八角形の断面形、淡い緑色の錆に覆われる箇所もあるが、本体の見えている個所もある、本体は銀白色を呈する	H091

5．貨幣

蔵品番号	名称	時代	長さ（mm）	重量（g）	備考	旧管理番号
313	刀銭	戦国	残長100	12	２片に割れている（未接合）、上半分が欠損、両面ともに錆とりがされ、赤味がかった黄金色の本体が見えている	H073
314	明刀銭	戦国	残長130	13	先端の一部が欠損、両面ともに錆とりがされ、赤味がかった黄金色の本体が見えている	H074
315	明刀銭	戦国	残長120	11	環のみ欠損、両面ともに錆とりがされ、淡い黄金色の本体が見えている	H075
316	明刀銭	戦国	残長120	14	環のみ欠損、両面ともに錆とりがされ、淡い黄金色の本体が見えている	H076
317	明刀銭	戦国	長140	17	２片に割れている（未接合）、両面ともに錆とりがされ、赤味がかった黄金色の本体が見えている	H077
318	明刀銭	戦国	残長133	18	２片に割れている（未接合）、環の一部が欠損、表面の錆とりがされ、赤味がかった黄金色の本体が見えている	H078
319	明刀銭	戦国	残長110	9	先端が一部欠損、表面の保存状態不良、両面ともに錆とりがされ、赤味がかった黄金色の本体が見えている	H079
320	明刀銭	戦国	長135	16	ごく一部が欠損、表面の保存状態不良、両面ともに錆とりがされ、赤味がかった黄金色の本体が見えている	H080
321	明刀銭	戦国	残長57	残７	「明」字をもつ中央部分のみ残存、表面は錆とりがされ、赤味がかった黄金色の本体が見えている	H081
322	明刀銭	戦国	残長108	残10	上端が一部欠損、表面は錆とりがされ、赤味がかった黄金色の本体が見えている	H082
323	明刀銭	戦国	残長64	残７	一部のみ残存、表面は錆とりがされ、赤味がかった黄金色の本体が見えている	H083
324	貨幣か	不詳	残長56	残４	欠損あり、表面は錆とりがされ、赤味がかった黄金色の本体が見えている	H084
325	布銭	戦国	残長54	残４	一部欠損、表面は錆とりがされており、黄金色の本体が見えている	H085
326	磬幣か	不詳	残幅72 高49	残７	一部欠損、表面は凸線で文様が施される、背面は無文、一部淡い黄金色の本体が見えている	H086
327	磬幣	東周	残幅79 高45	残７	一部欠損、表面は錆とりがされ、赤味がかった黄金色の本体が見えている。金属光沢をもつ	H087
352	直百五銖銭	蜀？	28	計測不可		H112
353	五銖銭	前漢？	24	計測不可		H113
354	五銖銭	前漢？	25	計測不可		H114

蔵品番号	名称	時代	長さ（mm）	重量（g）	備考	旧管理番号
355	貨泉	不詳	21	−	模造品	H115

6．その他

蔵品番号	名称	時代	長さ（mm）	重量（g）	備考	旧管理番号
342	管玉	不詳	21	5		H102

参考文献一覧

【中文】

安晓燕2015「銅鏡的起源与各時期的芸術特徴」『大衆文芸』2015年第１期

王仁湘1985「帯鉤概論」『考古学報』1985年第３期

王綱懐主編2015『中国早期銅鏡』上海古籍出版社

郭玉海2003「明清銅鏡的時代特徴」『故宮博物院院刊』2003年第５期

河北省文物研究所編1996『歴代銅鏡紋飾』河北美術出版社

顧望・謝海元編著1999『中国青銅図典』浙江撮影出版社

蘇強2012「明代銅鏡概述」『中国国家博物館館刊』2012年第４期

中国社会科学院考古研究所編著1999『安陽殷墟郭家荘商代墓葬　1982年～1992年考古発掘報告』中国大百科全書出版社

中国社会科学院考古研究所編著2018『安陽孝民屯（四）殷商遺存・墓葬』文物出版社

趙暁紅2015「宋金時期銅鏡浅析」『東方収蔵』2015年第９期

陳佩芬編著2013『中國青銅器辭典』第６冊、上海辞書出版社

陳柏泉1983「宋代銅鏡簡論」『江西歴史文物』1983年第３期

李彦平2017「唐宋時期銅鏡之変化」『尋根』2017年第２期

【日文】

大阪歴史博物館編2006『大阪歴史博物館 館蔵資料集３―中国鏡・朝鮮鏡―』

岡村秀典2017『鏡が語る古代史』岩波新書

久保智康編1999『日本の美術３　No.394中世・近世の鏡』至文堂

黒川古文化研究所1998『第79回展観　鏡―柄鏡から和鏡の源流に遡る―』

孔祥星・劉一曼著、高倉洋彰訳1991『図説 中国古代銅鏡史』中国書店

黄名時2014「隋唐時代の鏡文化－銘文鏡の特徴とその盛衰をめぐって－」『名古屋学院大学論集　言語・文化篇』第25巻第２号

國學院大學考古学資料館2006『服部和彦氏寄贈資料図録Ⅰ 和鏡・柄鏡』

実盛良彦編2019『銅鏡から読み解く２～４世紀の東アジア』勉誠出版

世田谷美術館他編1994『秦の始皇帝とその時代展』

泉屋博古館2018『泉屋博古』

趙海洲著、岡村秀典監訳、石谷慎・菊地大樹訳2014『中国古代車馬の考古学的研究』科学出版社東京

東京藝術大学1996『東京芸術大学所蔵鏡鑑 東洋の鏡』
東京国立博物館他編2015『特別展 始皇帝と大兵馬俑展』
東京大学総合文化研究科・教養学部美術博物館2010『東京大学総合文化研究科・教養学部美術博物館資料集 3 ―銅鏡―』
東京天理教館1974『天理ギャラリー第39回展―和鏡―』
中野徹2012『中国金工史』中央公論美術出版
中野政樹編1969『日本の美術10・11　No.42和鏡』至文堂
兵庫県立考古博物館分館開設準備室編2017『千石コレクション　鏡鑑編』兵庫県立考古博物館
廣川守1999「春秋戦国時代中原における帯鉤の編年とその使用形態（上）」『泉屋博古館紀要』第16巻
廣川守2000「春秋戦国時代中原における帯鉤の編年とその使用形態（下）」『泉屋博古館紀要』第17巻
大和文華館2018『特別展 建国一一〇〇年　高麗―金属工芸の輝きと信仰―』
早稲田大学會津八一記念博物館2018『穴澤コレクション　古代中国鏡の世界』